

## 日本の象徴二題

鎌田泰彦 (長崎大学地学教室)

### 天皇と佐世保港の化石

天皇陛下が相模湾の後鰓類(特にうみうし類)や那須の植物を御研究になって出版もされたことはよく知られた所であり、近い中にまた相模湾の海産物の御研究の成果が印刷されるという。陛下が採集される動植物で未知なものは、それぞれに専門家に依頼して納得のいくまで意見を聞かれるという話も衆知のことであるが、献上された化石についても早速専門家に研究させたということ、ごく最近知ることができた。

東京にある資源総合開発研究所の鈴木好一博士は、今でこそ応用地質の第一線で大活躍しているが、以前は東亜の非海棲貝化石の研究の開拓者として、大きな業績をもつ古生物学者である。国内でも九州、石狩、雨竜の諸炭田の含炭層から産出する非海棲貝類の詳細な研究をされている。昭和9年東大地質教室を卒業されて教室でこれらの研究を続けていた当時(昭和15年頃?)宮内庁から呼出しがあり、陛下が是非貴方に鑑定して貰う様にとのお達しがあったからといって、1個の二枚貝の化石を侍従から渡された。その標本は、佐世保港のしゅんせつをした時海底からすくわれたものらしく、軍港から採集された珍しい化石ということで、鎮守府から陛下に献上されたものだそうだ。

鈴木先生は慎重に(おそく丁重にでもあったろう)調べると、長尾巧博士が唐津炭田の芳の谷層(含炭層)から産出を報告している *Corbicula mirabilis* という「しじみ」の化石に同定されることが判った。同種のものは、長崎本線喜々津駅南方の国道35号線の沿線より沢山発見されているし(鈴木博士の報告)、また崎戸炭鉱の崎戸夾炭層からも産出する(本会誌第1号に藤井貢氏が報告)。佐世保港の周囲は、芳の谷層や崎戸層よりもはるかには若い地層である杵島層群上部か、佐世保層群が分布しているので、どこからその化石が港の底にまぎれ込んだのか不思議である。何故ならこの種類のしじみ化石は、佐世保市周辺の地層からまだ一度も発見されたためしがない。

しかし、そんな問題は別として、陛下が著名な古生物学者に依頼しないで、しじみ貝の化石の研究を専攻していた、まだ若輩の鈴木先生の存在を知っておられ、名指して問題の化石を渡されたことは、誠に驚嘆する許りである。

昨年11月、北松の地すべり調査に来られた鈴木好一先生にお伴した時、松浦の宿で、秋の夜長の寝物語りに先生から直接聞いたお話の一駒である。

### 「君が代」と地質学

灘尾文部大臣は、2月14日の衆院文教委員会、「今年は東京でオリンピックが開かれる年でもあり、国旗掲揚や君が代斉唱の普及に一

層の努力をしたい」と述べている。国旗としての「日の丸」は、その簡潔なデザインはもとより日本の地理的位置をよく示したのものとして申分

のない立派なものである。「日の丸」の国日本の東に、果しなくひろがる太平洋から真赤な太陽が昇ってきてアジアに朝が訪れる。これは「星条旗」のひるがえる合衆国に星が輝きはじめて世界の日が終りを告げるのと対称的である点面白い。

国歌としての「君が代」には全く法的規定がなく、ただ戦前から慣習的に君が代が国歌とされているのにすぎないのだそうだが、伝統ある君が代が我が国の国歌でないといひ切れる人がいるのであろうか。

4、5年前にも、いわゆる君が代論争が盛んに行なわれたことがあったことを記憶されている人も多いと思う。その頃、君が代には全く科学性がないではないか。さざれ石が激（いわお）となるなどは全く馬鹿げている。そんな非科学的な内容をもつ国歌は廃止した方がよい。と主張する人があった。所が逆に真面目な地質学者はそれに反論した。小石が集って堆積し、非常に長い地質的年代を経過すると立派に礫岩という岩石になるので、君が代にも科学性が充分含まれているのだと説明した。

ここで思い出されるのは、私が中学時代の国語の時間に聞いた君が代の解釈である。教わっ

た先生は小田観螢（雅号）さんといって、北海道歌壇の重鎮であり、新墾社という短歌の会を主宰していた。昔の人は、小石が次第に太ってやかては大きな岩となり、ついには山を造るという思想をいだいていたという。さざれ石が目には見えないが長い年月の間にいわおとなり、その上に苔が生えれば、悠久の時の流れを表現するのにまことにふさわしい。というのが、観螢先生の講釈の要点である。全く素朴な考えを詠んだ歌であるが、一国が永遠に存続して繁栄することを願った古人の気持が、このような解釈で本当に味えるような気がする。勿論君が代を詠んだ歌人は、礫岩の生成過程などの知識も全くなかったことは間違いない。

科学者の中にはともすればこういった身近な文学的作品に、無理押しに科学性をもたせて批判する人もある。科学者が真理の探究を行ない教育者がその正しい原理を啓蒙し、すべての人々が近代的な自然観をもつことが望ましいことは当然であるが、河原に転がる無心の小石が、だんだん太って巨大な岩に成長すると信じた先祖の思想に思いをはせながら「君が代」を斉唱するのもまた格別なものであろう。

## 投 稿 歓 迎

会誌内容を充実させるため、広く会員の方々の御投稿を希望します。本誌に掲載できなかったものが3篇（教材研究1、資料1、寄書1）がありますので、次号には特に研究発表的な原稿を望みます。また次号には「岩石園」に関する記事の特集したいので、蒐集岩石の種類・産

地・サイズ・配置や利用方法などの報告をお願いします。プランだけでも結構です。

原稿はなるべく400字詰用紙を用い、必ず横書きして下さい。研究発表、教材研究、資料の執筆者には掲載誌を3部贈呈致します。